

# 朝鮮近現代史とトライリンガリズム

## —— 1940年代の朝鮮人米軍通訳

宋恵媛 (大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター)

### はじめに

本稿では朝鮮、日本、米国の三地域を移動した朝鮮人通訳・翻訳者について論じる。太平洋戦争、米軍による日本と南朝鮮占領を経て、朝鮮戦争へと至る、各国家とそこに住む人々のあり方を決定づけることになる大事件が立て続けに起きた、1940年代を中心に見ていく。植民地支配下から冷戦体制へと、つなぎ目なしに移行した近現代朝鮮を把握するためには、中国語、ロシア語、英語といった隣接する言語世界との関わりを視野に入れる必要がある。本稿ではその試みの一つとして、三言語を操り米政府／米軍の通訳・翻訳者となった朝鮮人たちに着目する。これらの人々は朝鮮（語）、日本（語）、米国（英語）という異なる社会、言語、文化間を結び、その国際関係のあり方にも多大な影響を与えた。

日本による真珠湾攻撃によってその需要が激増した太平洋戦争中の米軍通訳・翻訳者の活動内容は、諜報活動のほか、捕獲文書（日本軍関連の書類、日記、地図）の英語への翻訳、日系人収容所での訊問と検閲、アジア太平洋地域の各戦地での日本兵の会話の盗聴、通信傍受、捕虜訊問、プロパガンダ文作成やラジオ放送、地図解説など多岐にわたる。多くの日系米人二世語学兵がこれらに関わった。機密が解除された1973年以降はその実態解明が進み、全米に7つある退役軍人会の会誌や文集のほか、回顧録、証言集、研究書なども数多く出版されている。2010年には、陸軍情報部（MIS）を含む、第二次世界大戦時の日系人部隊への議会名誉黄金勲章授与が決定された。

その一方で、時に行動を共にした朝鮮系の通訳・翻訳者について光が当たることは少ない。

その理由としては、当時の朝鮮系居住者の数が少なく（1940,41年の時点で、日系人18万人に対して13,000人程度）、通訳・翻訳者の数も限られていること、当時朝鮮が植民地下にあったため、朝鮮人居住者全体を把握しうる公的な団体が米国内になかったことが挙げられるが、何よりその存在の重要性が見過ごされてきたためだといえよう。

本稿では、20世紀の朝鮮人たちのトライリンガル（三言語）性に着目しながら、朝鮮人通訳・翻訳者たちの全体像を提示することを目的とする。安ヒョンジュ『二つの敵対国の間で——第二次世界大戦中の敵性外国人収容所の朝鮮人通訳たち』(Hyung-ju Ahn, *Between Two Adversaries: Korean Interpreters at Japanese Alien Enemy Detention Centers during World War II*, California State University, Fullerton, 2002)、J.マクノートン『二世リンギスト』(James C. McNaughton, *Nisei Linguists: Japanese Americans in the Military Intelligence Service During World War II*, Department of the Army: Washington, D.C., 2006)、鄭秉峻『玄アリスとその時代：歴史にのまれていった悲劇の境界人』(トルベグ、2015年)、エドワード・チャン、ウソン・ハン『コリアン・アメリカン飛行士のさきがけ』(Edward T. Chang, Woo Sung Han, *Korean American Pioneer Aviators: The Willows Airmen*, Lanham: Lexington Books, 2015. Kindle Edition)等の先行研究、およびハワイ大学マノア校図書館、サンフランシスコの日系米人歴史協会（NJAHS）、UCLA Library Special Collections、モントレールの防衛語学学校歴史記録コレクション Diffence language Institution Historical Records Collection等、米国での調査で得た一次資料を用いる。

## 1. 移民と留学：米国への到着

まず、朝鮮人の米国移民史を簡単に見ていきたい。1894年から1902年までの間に高麗人参商人がサンフランシスコに約200人にいたのに加え、1903年から1905年の間に7200人以上の朝鮮人がサトウキビ農園での労働者としてハワイに移住した。その後1910年から1940年にかけて、約1000人の留学生、写真花嫁、家族がサンフランシスコの港から入国した。が、1924年移民法施行以後は白人以外の米国永住はできなくなった。そして1941年12月の日本軍による真珠湾攻撃により、戦後まで朝鮮人の出入国は不可能になった。朝鮮人留学生は、55人の大韓帝国政府発行の旅券所持者（1903-1905）、上海を経由してきた541人の中国旅券所持者（1910-1918）、289人の日本旅券所持者（1920-1940）の三つに分けられる（鄭、10頁）。1940年の時点では朝鮮の高等教育に日本語は必須のものとなっており、日本の大学を卒業して渡米する者も一定数いた。つまり、この当時の朝鮮人留学生たちは、例外なく朝鮮語、英語、日本語の三言語話者だったのである。米政府／米軍のために働いた翻訳・通訳者は、日本旅券で渡米したこれら留学生（神学生が多かった）たちと、大学進学者を出し始めた移民二世たちから出た。

朝鮮人通訳・翻訳者について語る際に欠かせない人物は、1903年の第二船で、移民労働者たちの英語通訳としてハワイへ渡った玄楯<sup>ヒョンスン</sup>（1879年生）である。朝鮮、日本、上海、米国を移動した独立運動家で、徐載弼、安昌浩、朴容萬、李承晩と並ぶ、初期の在米朝鮮人指導者の一人だった。自身ばかりでなく、複数地域で教育を受け四か国話者となった子どもの玄アリス、ピーターも長じて米軍通訳として活動することになる。

## 2. 対日情報戦の始まり

米軍が日本語話者としての朝鮮人の利用価値を認めたのは、真珠湾攻撃の20年も前のことだった。米陸軍は1920年と1921年に、将来起こりうる日本との戦争に備え、米国内の朝鮮人留学

生の日本語能力に関するレポートを作成している（Ahn, 13頁）。情報提供者は、在米朝鮮人団体である大韓人国民会だった。1930年代には、自らの日本語能力を活用して米軍に進んで協力した朝鮮人もいた。1932年にハワイ駐在の海軍情報局（ONI）と接触し、情報員となった韓キルスである。真珠湾攻撃を予言した人物として米国で注目を集めた彼は、1933年から1937年まで米陸軍情報参謀部と海軍情報局に協力、日本名と英語名を使い、ホノルル在住日本総領事館で逆スパイとしても活動した（鄭、113頁）。

また1941年3月1日には、ワシントンD.C.で三・一記念日の演説が朝鮮語でラジオ放送されている。朝鮮や日本ではありえないことである。アナウンサーとなったのは、東京帝大を卒業後シアトルに留学に来て間もなかった黄ソンスだった。

## 3. 真珠湾攻撃直後： 日本人収容者と朝鮮人諷問官

宗主国－植民地という両者の関係性を反映して、米国内の日系人と朝鮮系の人々の仲は概して良好でなかったと言われる。だがコケージアン（白人）たちにとっては、たとえ朝鮮名を名乗ってはいても朝鮮人は「日本人」だった。そのような両者の運命が決定的に分かれるのは、1941年12月8日の日本軍による真珠湾攻撃後のことだ。その直後、ハワイ居住者の大部分を除く日系米人たちが強制的に収容所に送られたのに対し、ハワイと米本土の朝鮮人は収容所行きを免れた（ただし、日本人と結婚した朝鮮人数人が収容された（Ahn, 9頁）。また、ハワイでは朝鮮人の財産も凍結された）。

朝鮮人たちは、日米開戦を朝鮮解放の好機ととらえた。「朝鮮の勝利を米国とともに」というスローガンを打ち出した1941年4月結成の在美韓族連合委員会（UKC）は、朝鮮人証明書やバッジを発行し、日本人と間違えて危害を加える白人たちから身を守った。12月末に朝鮮、中国、フィリピン人で構成されたカリフォルニア・ナショナルガード・バタリオンの訓練が始まったときには、ロサンゼルス<sup>ロサンゼルス</sup>の朝鮮人人口の5分の1にあたる109人の男性が参加した（チャン、ハン、2015）。UKCロサンゼルスは新たな国家防衛

隊を組織し、太平洋戦争地域での監視役、通訳として従事しうる朝鮮人のリストを作成した(Ahn, 8頁)。朝鮮人エリートの日本語能力が、米軍に利することに自覚的だったことがここからうかがえる。ハワイ軍事政府は1942年3月16日、ハワイに住む朝鮮人を「敵性外国人」から「友好的外国人Friendly Alien」という新カテゴリーに分類しなおした。朝鮮人を取り込むことが得策だという計算が働いたのだろう。

米政府／米軍は真珠湾攻撃をきっかけに、本格的に朝鮮人留学生を日－英通訳としてリクルートし始めた。戦略諜報局は、要件を満たす朝鮮人学生のうち50人に十分な日本語能力があると判断し、うち14人を司法省と戦争局で雇った(Ahn, 61頁)。米国は、日本語能力が高く、かつ決して日本に寝返ることがない、これ以上ない理想的な人材を得たのである。だが一方で、米当局は、朝鮮人を雇う際に米国への忠誠度を測る記述式のテストを課し、特に念入りに身辺調査をした(MISLS Training History, 1944)。また、1940年にサンフランシスコで朝鮮人学生団体「<sup>シンドフ</sup>新到会」が結成されていたが、その会員たちも米政府／米軍にリクルートされた。その先は、司法省移民許可局管轄の日系人収容所、ニューヨーク市軍事情報局、ワシントンD.C.の戦争検閲局と戦略諜報局、サンフランシスコ戦争情報局(ラジオ放送)、FBI本部、ロサンゼルス連邦地方裁判所、太平洋信託統治諸島のジャングルで、何人かは兵士として前線へ赴いた(Ahn, 2頁)。

真珠湾攻撃直後、朝鮮人はただちに敵性外国人収容所の訊問通訳として駆り出された。ここは、12万人の日系人が収容された戦争移住局管轄のリロケーションセンターや、日本に忠誠心を持つと判断された人々の隔離収容所とは異なる性質の場所だった。真珠湾攻撃時に日本に協力した者の抽出、税金納付状況や違法入国を調査するという名目で、危険人物とみなした一世の指導者や一時滞在のビジネスマンなど、7000人以上の日本人を収容した施設である。

Ahnは1990年代前半に、ミゾラ収容所(金チェスター・チェフン、黄ソンス、裴エドワード・イファンの三人)、フォート・リンカーン収容所(朴サンヨプ、李チャンヘ、名前不詳のもう一人)、テキサス州ケネディ収容所の朝鮮人通訳7人が、1942年2月から6か月間、訊問に関わった

事実を、インタビュー調査を通して明らかにしている。後に駐日米大使となるマイク・マンズフィールドも訊問官として働いたミゾラ収容所で、彼らは白人の民間訊問官とペアになって全収容者を長時間訊問すると同時に、米国への忠誠度テストの通訳、手紙の検閲を行った。

同じ頃、ロサンゼルスFBI本部では、崔ボンウン、李ジュンジョン、李ジンムク、鮮宇ハロルド・ハクウォン、崔ユンスンが、真珠湾攻撃の協力をしたと目される黒龍会のトップの48時間にわたる訊問に携わったという(Ahn, 39頁)。

米軍の信頼を得た日系一世たちが収容所での通訳、翻訳の仕事を担うようになった後、朝鮮人たちは引き続き米国の情報戦を、別の様々な形で手助けした。裴イファンはワシントンD.C.の検閲局で太平洋地域や米国内に送られた電信、手紙の傍受を担当し、金チェフンは1944年半ばに志願して戦略諜報局で働いた。1945年8月に朝鮮で撒かれた、日本の無条件降伏を伝えるリーフレットも作成したという。黄ソンスはミゾラ収容所で働く前に、ワシントンD.C.からリクルートされてニューヨーク陸軍情報部で東京地図の翻訳を行い、前述した三・一記念演説の朝鮮語放送も行ったが、その後は、李サミュエル・トンジン、李クソン、同志社大学卒の金ダニエル・テムクとともに、サンフランシスコ戦争情報局で短波ラジオの日本語放送に責任者として関わった。金ダニエル・テムクの元妻の鄭スンドゥクも同じ場所に勤務した。また、李ジンムクは朝鮮語放送のアナウンサーとして働いた(Ahn, 40頁)。

また、鄭(2015)によると、チェリストの郭デイヴィッド・チョンソンは、朝鮮人同僚5人とともにシカゴ・ニューヨーク郵政公社検閲局に勤務、早稲田大学卒の金世施は米国務部検閲局で日本語文書を分析、李ジョンガンは米陸軍情報部(Military Intelligence Service, MIS)に勤務した。その他、戦略諜報局、外国経済管理委員会でそれぞれ3人の朝鮮人が、対日諜報活動に関わった。郭デイヴィッド・チョンソン以下、すべて1945年秋に在朝鮮軍政庁の朝－英通訳として雇われた男性たちである。その他、コリアン・アメリカン作家の嘴矢で『草ぶきの屋根(Grass Roof)』(1931)、『イースト・ゴーズ・ウェスト(East Goes West)』(1937年)の著作の



あるヨンヒル・カン（Younghill Kang）は真珠湾以後、戦争局の要請で米軍に協力することになる。

#### 4. 二種類の日本語学校

1942年3月に設立されたMISは、日系人たちが数多く関わったことで知られる。太平洋地域の各地で、日本軍の戦略や地図、戦術命令、盗聴した情報、兵士の日記などの翻訳を担ったほか、前線で同僚の白人兵に護衛されながら日本兵の投降を促したり、捕虜の訊問を行ったりした。「100大隊、442連隊、MIS—MIS語学学校、付属部隊における全従事者登録」（日系米人第二次世界大戦記念連合『Echoes of Silence』、2002年）には総勢20,833人の名が連ねられており、日系人だけでなく朝鮮系、中国系、白人、その他の米国人も含まれている。そのうち名前や出生地から筆者が朝鮮人と判断した人の数は5、60人前後である。ただし、中国人（主に台湾出身者）との区別がつかない場合もあるので、これより少ない可能性もある。

米軍兵士たちが語学訓練を受けた場所は、米国内の大学に設置された海軍の日本語プログラムとMIS語学学校（MISLS）の二つに分けられる。朝鮮人はそのどちらにも関わった。

1943年以降、全米12の大学で白人将校を主な対象にした日本語と日本地域研究のプログラムが提供された。UCバークレー校、コロラド、ミシガンの各大学で学んだ白人将校たちは、その後MISLSにやってきたが、当初は朝鮮語なまりの日本語を話していたという逸話（McNaughton, 143頁）からうかがえるように、朝鮮人も講師として勤務していた。

前記の李チャンヘは、1942年9月までボルダーにあるコロラド大学に付設された海軍語学学校の講師を務めた。日本研究の第一人者となるエドワード・サイデンステッカー、ドナルド・キーンなどがここで学んでいる。李はその後UCLAでも日本語を教えたが、その学生の一人はサイパン、沖縄、ソウル、東京と移動し、韓国国防警備隊の幹部候補生学校の講師、シベリア帰りの人々を調査した舞鶴帰還センターの訊問チームリーダーなどを歴任することになる、ベンジャミン・ハザード中將だった（Benjamin Hazardの証言、NJAHS所蔵）。また、1942年2月にUCバーク

レー校に海軍将校47人が入学したが、このとき日本語講師のウワーンは、「独特の朝鮮語なまりを話す数人の朝鮮人を含む追加の講師をすぐに雇った」（McNaughton, 58頁）。

1943年1月開講のミシガン大学の日本語プログラムの講師一覧には朝鮮人の名はないが、かつて同大学で教鞭を取ったヨンヒル・カンがその設置に協力した可能性があるという（McNaughton氏から筆者へのメール、2017.9.12）。ヨンヒル・カンの年譜の1942年の項に、「夏の10週間、陸軍の日本語学校のディレクターとして働く」とあるが、これがそのことを指しているのかもしれない（Chronology: the life and work of Younghill Kang, *East Goes West*, Kaya, 1997）。同氏によると、ヨンヒル・カンは陸軍戦務軍情報教育部発行の「日本語フレーズブック」（1943）の匿名著者でもあり、ワシントンD.C.の戦争局でも、後に駐日大使となるエドウィン・ライシャワーとともに対日情報活動を行ったという。黄ソンスの記憶によれば、ヨンヒル・カンは彼と1942年以前にとともにニューヨーク陸軍情報部で働いており（カンの「年譜」では、1944年に情報部教育部の言語コンサルタントとして働いたとある）、「年譜」の1943年には、経済戦委員会で朝鮮、マンチュリア部門の首席経済アナリストとして働いたと記述されている。

一方MISLSでは、朝鮮系の人々は講師でなく学生として日本語を学んだ。1941年11月に開校した第4軍情報学校を前身とするMISLSは、1942年5月にキャンプ・サヴェージュへ規模を拡大して移転、1944年にはフォート・スネリングへ再移転した。このとき、戦後を見据えて中国語、朝鮮語クラスも開講された。1946年の閉校までに、約6000人の日系、中国系、朝鮮系、コケージアンが日本語の日常会話、兵語（軍事用語）、地図の読み方、草書解読などの厳しい訓練を受け、3700人が戦地に送られた。MISLS関連の各種の名簿、元学生の証言集などからは、朝鮮人講師の存在は確認できないが、それは朝鮮人留学生たちが、米市民権を持っておらず、軍の機関で教える資格がなかったためとみられる。

MISLSは、1943年1月の中国系学生に続き、同年春には朝鮮系二世たちに日本語を学ばせる計画を立て、カリフォルニア大学、在米

朝鮮人団体、留学生団体、李承晩等に接触している（“Americans of Chinese Ancestry and Americans of Korean Ancestry”, *MISLS Training History*, 1944）。1943年8月7日、MISLSのルソー中尉は、朝鮮人将校2人と下士官10人が現在在籍しており、さらに16人が新たに到着予定だと李承晩に伝えている。朝鮮人学生が日本人講師から教わることに李承晩が強い拒否感を表したことを受け、ルソー中尉は朝鮮人学生は朝鮮人か白人将校の指揮下に置かれると言明している。

ただし朝鮮系二世学生の質はさほど高くなかったようで、1943年12月には朝日英と三言語を扱うことの困難さが内部で報告された。そこでは、優秀な学生を得られない理由として、朝鮮人学生数が日系人と比べ圧倒的に少ないことが挙げられている。1944年1月25日の時点では、将校1人と下士官6人からなる朝鮮系二世部隊1隊のみが、かろうじて陸軍空軍移動通信飛行中隊への入隊準備ができていと報告された。

玄楯の息子でハワイ生まれの玄ピーターも、MISLS日本語クラスで学んだ朝鮮人の一人である。三か月の教育を経て1945年5月10日、彼は米ウィスコンシンのマッコイ捕虜収容所に通訳官として配属された。そのイタリア、ドイツ、日本兵のうち、150人はマーシャル群島で捕虜となった朝鮮人だった。そのうちの何人かは、1945年前半に米政府が計画した朝鮮半島浸透作戦NAPKOプロジェクトの実行部隊に選抜された。

## 5. アジア・太平洋の戦地で

朝鮮系二世の米軍人のうち最も有名なのは、日系人部隊である第442連隊戦闘団第100歩兵大隊に所属し、フランス、イタリア戦線で戦績を挙げたロサンゼルス生まれの金永玉Yong-Ok Kimである。その他、ハワイ生まれが多くを占める朝鮮系二世たち数十名も、兵士として前線で戦った。朝鮮人通訳・翻訳者はその任務の性質上、ヨーロッパ戦線に赴くことはなく、1942年から1945年にかけてアジア太平洋方面で活動を行った。

太平洋戦争の際に通訳・翻訳者として働いた朝鮮人で、現時点で確認できるのは以下の人々である。日系人の元語学兵のロナルド・タカ

キは、その著書でガダルカナルの米海軍の移動無線情報隊に2人の朝鮮人がいたと記しているが<sup>8</sup> (Ronald Takaki, *Strangers From a Different Shore: a History of Asian Americans*, Boston: Little Brown, 1989)、これはフォート・リンカーン収容所通訳だった朴ヨンハクと李チュンジョンのことだろう。二人は1942年5月から翌年4月までソロモン諸島とガダルカナルで従軍した (Ahn, 39, 40頁)。

また、1944年7月頃に、日本がサイパンに連れてきた数千人の朝鮮人労働者とのコミュニケーションのため、ハワイ生まれの朝鮮人3人が派遣されたという記録が残っている (McNaughton, 268頁より再引用)。元日系人二世語学兵のリチャード S. オグロは、1945年7月頃に英連邦軍の捕虜訊問を手伝うため、Kynsul Leeという朝鮮系米人を含む20人の語学兵とデリーからボンベイへ行ったと回顧している (Richard S. Oguro, *Senpaigumi*, 1980, 64頁)。また玄楯は、1945年7月20日にホノルルの戦争捕虜収容所に訓練教官として臨時雇用された (鄭, 113頁)。

ミゾラ収容所通訳だった金チェフンは1944年末、朝鮮人武装勢力を使って日本軍を攻めるという米軍戦略の一環として、重慶の臨時政府軍を訓練するため、咸キュンジュン率いる戦略諜報局の朝鮮系米人部隊の一員として、李フランク・ジョンスク、徐サンボクらとともに中国へ渡った (Ahn, 128頁)。ここからは、米軍が在米朝鮮人の日本への敵対意識を効率的に利用していたことがうかがえる。

## 6. 第二次世界大戦終結： 通訳たちの日本と朝鮮への移動

1945年8月に第二次世界大戦が終結すると、各地での日本兵の武装解除や日本占領のため、日本語通訳・翻訳者の需要はますます高まった。アジア、オセアニアの各戦地から直接、あるいは米国から新たに通訳・翻訳要員が日本へ送られ、連合国翻訳通訳部 (ATIS)、GHQ/SCAPの占領政策実施のため各都道府県に置かれた第8軍司令部民政部、民間検閲局 (CCD)、防諜部隊 (CIC) などに所属し、GHQの「目と耳」として働いた。戦犯裁判の補助や日本政府との連絡も重要な任務だった。1952年4月の日本占領終了ま

でに約6000人の語学兵や軍属が関わった。朝鮮系の人々は太平洋地域の戦地から、あるいは米国から直ちに朝鮮に送られており、日本のGHQで勤務した朝鮮人通訳・翻訳者については不明な点が多いが、全くいなかったわけではない。

13人の女性民間検閲隊の一員として、11人の日系二世女性と、Lily Leeという中国系とみられる女性とともに1945年11月1日にハワイから日本に到着し、軍属として東京のGHQに勤務した玄アリスはその一人だ。民間検閲隊の任務は、日本政府との連絡、新聞、雑誌、書籍などの刊行物や郵便検閲だった。玄楯の長女で玄ピーターの姉であるアリスは、ソウル、上海、日本、米国で学校へ通った四か国語話者で、1936年にはハワイで米軍の中国語翻訳官として働いていた(鄭、115頁)。

GHQで働いたもう一人の人物は、「Chung」(鄭あるいは丁)である。当時の在日朝鮮人発行の朝鮮語新聞、雑誌の検閲済み文書に、検閲者として頻繁にその手書きの署名がみられる。東京のGHQで働いた米軍人・軍属の名簿にこの姓を持つ者はないことから、現地採用された在日朝鮮人だった可能性もある。

米軍は敗戦国日本だけでなく、その植民地下に置かれていた朝鮮の南半部も直ちに占領した。在朝鮮米陸軍司令部軍政庁(米軍政庁)は、今度は朝-英通訳を確保するのに奔走することになる。玄アリスは日本到着後の一か月後である1945年末に、早々と朝鮮軍政庁の民間通信検閲団(CCIG-K、手紙、電報検閲や電話盗聴を行う部署)に移され、朝鮮系米国人の情報系統の職位としては最高位についた(鄭、153頁)(その後、共産主義者と緊密に連携したとして軍政庁から追放され、朝鮮民主主義人民共和国にわたるも、そこで米国のスパイとされ1955年に粛清された)。

アリスの弟の玄ピーターもまた、米國務省に直訴して陸軍軍属および朝鮮語通訳官として解放直後の朝鮮へ向かった。マッカーサー司令部の要請を受け、1945年11月、玄ピーターを含む17人の朝鮮語-英語通訳が、朝鮮人軍属としては最高位だった少尉として、朝鮮占領支配を担当した米24軍司令部に着任した(鄭、128頁)。前述のように、そこにはかつて対日情報戦に協力した米国留学生たちが多く含まれていた。24軍

はまた、フィリピンで捕虜となった日本軍の朝鮮人軍属が朝鮮へ帰還する際に、彼らを通訳として使ってもいた(Warren Tsuneishiの証言、NJAHS)。

MIS部員の日本語能力は、第二次世界大戦後の朝鮮でも活かされることになった。1945年9月6日に朝鮮へ最初に偵察に向かった20人の米兵に随行したのは、朝鮮人の日本人への憎悪を考慮して、日系人ではなく、白人のハザード中尉だった。UCLAでの李チャンへの教え子である。その二日後には30人の日系二世語学兵が24軍司令部に派遣された。朝鮮に駐屯していた日本軍の武装解除と日本への帰還業務を遂行するためだった。米軍が解放後の朝鮮を支配するにあたり、旧植民地統治機構の日本人たちの協力を頼りにしたこと、朝鮮人指導者たちがみな日本語教育を受けていたことが、朝鮮占領を日本語で遂行することを可能にしたのだった。終戦後、沖縄からソウルへ直行した24軍所属の元語学兵ウォーレン・ツネイシは、「あまりに早く、効率的にこれらの業務を遂行したことに驚いた」という(Warren Tsuneishiの証言)。MIS部員たちの最初の仕事の一つは、全く足りていなかった通訳・翻訳者を現地調達することだった。こうして朝鮮半島で、民間の朝鮮人英語通訳・翻訳者が多く生まれることになる。

一方、1945年10月、カルヴァン・キム中尉が朝鮮系下士官24人とともにフォート・スネリングのMISLSに到着した。翌月26日にはさらに15人の朝鮮系兵士が加わった。第二次世界大戦終結後に日本と朝鮮の両方を占領した米軍は、今度は在米朝鮮人の朝鮮語能力を必要としたのだった。その後、MISLSは陸軍語学学校US Army Language Schoolと改称しモントレーへ移転したが、そこで1951年から1996年まで(1963年に防衛語学学校(DLI)と改称)の朝鮮語講師、責任者を務めたのは孫ジョンヨンである。春川の米国人郡長通訳を経て1948年に渡米した、元日本軍学徒「志願兵」だった(John Youn Sohn, *Korean Gakuhei: My Life in the Japanese Army*, River's Bend Press, 2008)。

米戦略諜報局は1945年、終戦後を見据えてペンシルベニア大学の日本語と朝鮮語の6か月のコースを開設した。前出の李チャンへは1945年以前と以後にシアトルのワシントン大学で、崔ボ

ンユンはUCバークレー校で、それぞれ朝鮮語と朝鮮史を教えた。金チェフンは1952年から1957年まで、朝鮮派遣予定の将校たちにワシントンD.C.で朝鮮語を教えた（Ahn, 128頁）。1940年代後半の米国の東アジア政策転換に伴い、彼らは日本語講師から朝鮮語講師へと変貌を遂げたのである。逆に、東京のGHQでタイラー将軍の通訳などを務めたマサト・イノウエは、1950年代初めにモントレーの陸軍語学学校で朝鮮語を一年間学んでいる。

## 終わりに

本稿では、日本支配下におかれた朝鮮人通訳たちが、三言語話者としていかに米軍と関わっていったかに迫った。太平洋戦争で捕虜となった日本兵や軍属の中には、日本語を解さない朝鮮人も交じっており、その際には朝鮮語話者としての役割を果たすなど、日本語と朝鮮語が混在していた帝国日本の言語状況に、これらのトライリンガルたちは完璧に対応しえたのである。その能力は、米国が戦後、日本と朝鮮を同時に占領する際にも大いに役立てられたのだった。

本稿では1940年代までを中心に見てきたが、その後も三言語状況は形を変えながら続いた。南朝鮮／韓国では、米国の教育システム導入、キリスト教の浸透など、英語の影響力が急速に増大していく。1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると、韓国では捕虜訊問や米軍との連絡のための即席通訳たちが大量に生まれた。また、日本から在日義勇兵として韓国へ渡り、米軍の通訳となる人物、逆に米軍通訳をへて日本へ逃れる人物も出た。朝鮮系二世の通訳たちも太平洋を越えて従軍した。一方、日系二世語学兵たちは朝鮮でもその日本語能力を発揮し、太平洋戦争時には考えられなかったような米軍内での地位上昇を実現していく。1950年末の中国参戦によって中国語も加わり、朝鮮をめぐる言語状況はさらに複雑な様相をみせるが、その詳細については稿を改めたい。

\* 本研究は科研費17K02666の助成を受けたものである。